



事象フレームと接触動詞の多義性

著者	田辺 英一郎
雑誌名	国際文化研究
巻	23
ページ	81-93
発行年	2017-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00120767

事象フレームと接触動詞の多義性*

田 辺 英一郎

要 旨

sweep や wipe をはじめとする接触動詞は、多様な文法形式の文に用いられることが知られている。本稿は、これらの文の意味の背景には「接触行為によるモノの移動(あるいは状態変化)」という除去を表す事象フレームがあることに着目し、これをイメージスキーマ表示する。一方、本稿は例えば John swept/wiped the floor. のような NP V NP 形の文を基本形と見なし、この基本形の事象フレームを説明の出発点とする。そして、それぞれの事象フレームの参与者にプロファイル、脱プロファイルあるいは再解釈といった認知的操作を適用すると、接触動詞の様々な意味と文法形式の派生が包括的に説明できることを示す。

【キーワード：事象フレーム／プロファイル／トラジェクター／ランドマーク／認知的操作】

1 はじめに

Rappaport Hovav and Levin (1998) (以下、RHL) は、sweep、wipe などの接触動詞 (contact verbs) が、多義性により次のような多様な統語的振る舞いを示すことを指摘している。

- (1) a. Terry swept.
b. Terry swept the floor.
c. Terry swept the crumbs into the corner.
d. Terry swept the leaves off the sidewalk.
e. Terry swept the floor clean.
f. Terry swept the leaves into a pile.
- (2) a. Terry wiped.
b. Terry wiped the table.
c. Terry wiped the crumbs into the sink.
d. Terry wiped the crumbs off the table.
e. Terry wiped the slate clean.
f. Terry wiped the crumbs into a pile.

RHL (1998:97-99)

以下に述べることは、(1)、(2) の両方に当てはまる。(b) は接触動詞の文の基本形である。この形が基本形であることは、Levin and Rappaport Hovav (1991) や中村 (2003) が指摘しており、本稿もこの指摘は基本的に正しいと見なす。(a) は接触面を表す目的語が省略された形である。

RHL は、復元可能なコンテキストが与えられれば、このような形が可能であるとしている。(c)、(d) は使役移動、(e) は状態変化、(f) は作成を表す。これらは基本用法 (b) からの拡張用法であり、(b) および (a) が活動事象 (activity) を表すのに対し、これらは達成事象 (accomplishment) を表す。

RHL が挙げる接触動詞の例は (1)、(2) のみだが、本稿は次のような例にも注目する。

- (3) a. Terry swept the leaves off.
- b. Terry wiped the crumbs off.
- (4) a. John wiped a cloth over the table.
- cf. *John wiped a cloth.
- b. John rubbed a cloth against the door.
- cf. *John rubbed a cloth.

(3a, b) は、それぞれ (1, 2d) から接触面を表す項を省略した形に当たる。(4) では、道具を表す語句が目的語となり、場所を表す語句が斜格に降格され、この生起が義務的である。接触動詞については、(4) のような表現形式は必ずしも生産的ではないが (Dixon 2005:114)、本稿はこうした形式も考察対象とする。

本稿は、(1)、(2)、(3) および (4) の意味の背景には「接触行為によるモノの移動 (あるいは状態変化)」というひとまとまりの事態、つまり除去を表す (事象) フレームがあることに着目する。そして、このイメージスキーマ表示を利用して、接触動詞の多義性とこれに伴う多様な文法形式を包括的に説明することを試みる。その際、プロファイル、トラジェクターおよびランドマークといった認知文法の考え方を援用する。いま上で述べたように、本稿は (1, 2b) を基本形と見なすので、この意味と形式が説明の出発点となる。

2 テンプレートの拡大による説明の検討

RHL は、動詞のテンプレートの拡大に基づいて動詞の多義性とこれに伴う多様な文法形式を説明している。テンプレートとは、ここでは、述語分解表示された動詞の事象構造のことである。sweep を例にとると、この動詞の中核的な意味は [x ACT <SWEEP> y] というテンプレートで表される。この事象構造は (1a, b) の sweep の意味を表す。y 項に下線があるが、これはこの項が必ずしも統語的に実現しなくてもよいことを示す。上で、接触動詞の単なる接触行為の意味が、状態変化や使役移動などへ拡張すると述べたが、これをテンプレートの拡大で説明すると次のようになる。同じく sweep を例にとると、状態変化へ意味拡張する場合は [x ACT <SWEEP> y] に [BECOME [y <STATE>]] が付け足され、使役移動へ拡張する場合はこれに [BECOME [z <PLACE>]] が付け足される。こうした操作により、達成動詞 sweep の事象構造として次のようなものが生成される。x 項は動作主、y 項は場所 (接触面)、z 項は除去物をそれぞれ表す。

- (5) a. [x ACT <SWEEP> y] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]
 b. [x ACT <SWEEP> y] CAUSE [BECOME [z <PLACE>]] RHL (1998:119-120)

(a) は (1e)、(b) は (1c, d) の意味をそれぞれ表す。RHL によると、テンプレートは (5a, b) のような達成動詞のそれになるまで拡大可能である。また、上位事象に下位事象が付け足される際、この二つの意味関係は関数 CAUSE によって保たれる。なお、作成を表す (1f) については、テンプレートの拡大による説明の中では言及されていない。

テンプレートの拡大の可否という観点に立つと、run、whistle あるいは wipe、sweep などの活動動詞と break に代表される状態変化動詞との決定的な意味的、文法的違いが説明できる。RHL によると、前者はテンプレートの拡大が可能なので意味や文法形式が拡張するが、後者は（最初から達成のテンプレートを持つことにより）これが不可能なので意味や文法形式が拡張しない。本稿が問題にする例について言えば、テンプレートの拡大や (5) の表示は、(1,2a) のように目的語が省略できることや、活動を表す基本形 (1,2b) が達成を表す (1,2c)、(1,2d)、(1,2e) へ意味や文法形式が拡張することを理論的に説明している。

しかし、RHL の説明には幾つか不十分な点が思い当たる。まず指摘したいのは、使役移動を表す (5b) の表示には使役の連鎖が明示されていないという点である。なぜ x が y に SWEEP という行為を行うことで z の位置が変化するのは、この表示だけでは不明である。また、テンプレートの拡大は、状態→到達あるいは活動／到達→達成などの意味拡張を説明する上での一種の根本原理であり、それぞれの動詞の意味の細部に立ち入る性質のものではない。よって、テンプレートの拡大のみでは、それぞれの接触動詞の意味が意味拡張に具体的にどう関わっているのかを説明することはできない。(5) について言えば、テンプレートが拡大できるから [x ACT <SWEEP> y] に [BECOME [y <STATE>]] や [BECOME [z <PLACE>]] を付け足せると説明しても、sweep の接触行為の意味がこうした意味拡張に具体的にどう関わっているかを説明したことにはならない¹。動詞の意味拡張を具体的に説明するためには、それぞれの意味の細部に立ち入る必要がある。

意味の細部で本稿が注目したいのは、sweep、wipe などの接触動詞が表す行為には、通常、何かを除去するという目的があることである（中村2003、都築2004、Nemoto 2005など）。これは、言語使用者が「接触行為+不要物の移動（接触面の状態変化）」をひとまとまりの事態と見ていることを示唆している。前節で述べたが、本稿はこのひとまとまりの事態をいわゆる「フレーム」の一つと見なしている。そこで、次節では、本稿が問題とする表現形式をフレーム意味論で説明する Boas (2003) を検討してみたい。

3 Boas (2003) の事象フレームの検討

フレームとは、一般的に言うと、それぞれの語の背後にある、習慣、経験、信念、知覚、さらには記憶などに関する知識構造を指す (Fillmore 1982など)。Boas (2003) は、wipe、sweep、rub、wash、polishなどを不要物除去の動詞 ('removal of unwanted substance' verbs) と呼び、これらは

本稿が問題にする接触動詞に相当する。Boas (2003) は、こうした動詞が表すひとまとまりの出来事を一つのフレームにとらえ、これらの意味拡張を説明している。Boas は、こうした動詞が全部で五つの事象フレーム (event frame) を持つと述べている²。funnel-sense、removal-sense-1、removal-sense-2、creation-sense および absorption-sense の五つである。これらのうち、absorption-sense 以外の四つが本稿の問題に関わっている。第一節の例で言うと、funnel-sense、removal-sense-1、removal-sense-2、creation-sense はそれぞれ、(1,2c)、(1,2e)、(1,2d) および (3a,b)、(1,2f) の意味に相当する。Boas はこれらの事象フレームを、イメージスキーマを使って表している。以下、これらの事象フレームに関連する例文、スキーマ表示およびを参与者についての記述を示す。例文は (8) を除き一つだけ挙げるものとする。

(6) Funnel-sense

- a. A couple of inmates were picking up leaves from around the graves, sweeping them into a large black sack.



- c. Ag: entity exerting force

Pt: substance

p 3: directional PP with a surface or container as its end location Boas (2003:206-207)

(7) Removal-sense-1

- a. Hargreave wiped his plate clean with a piece of garlic bread.



- c. Ag: entity exerting force

Pt: surface, or any object that has a surface

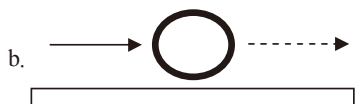
p 3: property of surface that holds of the surface after unwanted substance have been removed

Boas (2003:207-208)

(8) Removal-sense-2

- a. There are tears on his face and I wipe them away.

- a'. Can I rub the lipstick off the end of your nose?



- c. Ag: entity exerting force

Pt: object or substance that may be removed from a surface by employing force to it

p 3: location that an object or subject may end up in as a result of being removed from a surface

Boas (2003:208-209)

(9) Creation-sense

a. Julio rubbed the dirt into a pile.



c. Ag: entity exerting force

Pt: object affected by force emitted by the agent and which subsequently becomes part of a large entity that contains it

p 3: entity that comes into existence as the result of the activity performed by the actor upon the patient

Boas (2003:209-210)

Ag、Pt はそれぞれ Agent (動作主)、Patient (被動者) の略である。p 3 は、いわゆる第三の参与者を表す。(6) と (8) の p 3 は少々分かりづらいが、前者の p 3 は前置詞句に実現する着点、後者の p 3 は明示されていない移動物の着点をそれぞれ表す。(6)-(9) のイメージスキーマ表示は、ある表面に位置する物体に動作主の力が伝わり、この物体が移動するといった参与者間の力動関係 (force dynamic relation) を表す点が共通している。これにより、四つの事象フレームに共通する意味、ここでは使役移動の意味を図式的に明示することが可能になる。また、これらの事象フレームは、動作主の力は表面ではなく、表面にある物に向けられている点も共通している。太線で示される参与者は、プロファイルされているものである。(6)-(9) の事象フレームは、移動物と着点、接触面、移動物、移動物と構築物がそれぞれプロファイルされていることを表す。Boas は、事象フレームが文を認可する (license) と考えることで文の成立を説明している。ここで言う認可とは、文の意味が事象フレームを事例化することに相当する³。これらの事象フレームは、イメージスキーマにより、それぞれの文の意味の共通点と相違点を明確にしている。またこれらは、接触行為の意味が多義性にどう関わるかを図式的に表しており、「接触行為→モノの移動」という使役の連鎖もはっきり読み取ることもできる。これらの事象フレームは、前節にて指摘した RHL の説明の問題点を解消していると言える。

イメージスキーマで事象フレームを表示するという点は本稿も取り入れたいが、よく見ると Boas の事象フレームにも幾つか問題点があると思われる。まず指摘したいのは、上で述べたことだが、動作主の力が表面ではなく、表面にあるものに向けられているという点である。例えば John wiped the crumbs from the table. の意味を考えたとき、wipe という動作の対象が the table なのか the crumbs なのか今ひとつ分かりづらいので、動作主の力は移動物に向けられると見ることもできるかもしれない。しかしここで、中村 (2003:37) の主張に着目したい。中村は John wiped the

blood from the wall. という例を挙げ、動作の対象は the wall であって the blood ではないと述べている。the wall (壁) の表面をふくことはできるが、the blood (血) の表面はふくことができないというのが根拠である。本稿はこの主張を支持し、接触動詞の事例全般に当てはまると考えたい。

Boas (2003) は、事象フレームの参与者が統語構造で何らかの文法関係に実現する際にプロファイルがどんな役目をするか明確に述べていない点も問題だろう。(6b)-(9b) の表示を見る限り、①プロファイルされる参与者は主語を除く何らかの統語項に実現し、②このうち一つは目的語に実現する、ということは読み取ることができる。ただし、(6b) と (9b) の事象フレームはプロファイルされる参与者が二つあるので、単にプロファイルされる参与者に着目しただけでは、どちらが目的語になるかまでは予測できない。例えば、プロファイルされる参与者が二つの時は、力動関係において先行するものが目的語に実現し、もう片方は前置詞句に実現するといった補足が必要になる。

(6-9b) の事象フレームの中には、表示の形自体に問題があるものもある。まず、(7b) は、プロファイルの役割の曖昧さに関連する問題があるだろう。(7b) では、接触面を表す参与者がプロファイルされている。Boas はこのプロファイルが何を意味するか特に言及していない。他動詞結果構文では、目的語が結果句に叙述される、つまりこれがある種の意味的な際立ちを持つので、これに当たる参与者がプロファイルされることは、直感には一致している。しかし、このスキーマ表示をみただけでは、これが状態変化事象を表すことまでは読み取りにくい。(7b) は、接触行為によりモノが移動し、これに伴い状態変化が起こるという一連の出来事を明示する形に修正する必要がある。

(8b) の事象フレームは、目的語に不変化詞 away が続く文 (8a) とこれに起点を表す前置詞句 off the end your nose が続く文 (8a') の両方に同じ形を当てはめている点が問題である。両者は、似てはいるがあくまで異なる文法形式である。off は確かに、前置詞にも不変化詞にも使えるが、これに名詞句が続く以上 (8a') の off は不変化詞ではなく、前置詞と考えるべきである。ここで、off の代わりに from を使うと起点を表す参与者を省略できないことにも注意したい。

- (10) a. Can I rub the lipstick from your nose?
b. *Can I rub the lipstick from?

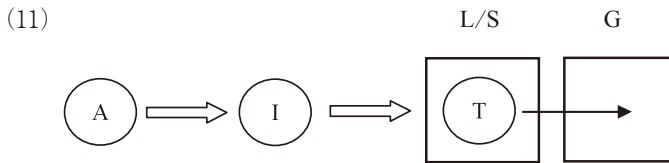
(10a) と (8a') は構文タイプが同じと考えると、(8b) の事象フレームは (10a) にも当てはまるはずだが、これは起点を表す参与者 ((10a) では your nose) が義務的に生起することを表していない。(8a') や (10a) のような文の意味を明示し、かつ、(8b) とは形が異なる表示を他に考える必要がある。

このように、Boas (2003) の説明には、①動作主の力が接触面ではなく移動物に向けられている、②プロファイルの役割が明確ではない、③状態変化を表す文の事象フレームが状態変化を明示していない、④(除去物を表す) 目的語に前置詞句が続く文と不変化詞が続く文の両方に同一の事象フ

レームが当てはめられている、といった問題点がある、次節では、これらの問題点を解消する形で、かつ、上で述べたように基本形（NP V NP）を出発点として、接触動詞の多義性とこれに伴う多様な文法形式を説明したい。

4 認知文法を援用した説明

前節にて、動作主の力は移動物ではなく接触面に向けられていると見るべきだと述べた。本稿は、この点を事象フレームの形に反映させる。本稿は、Boas と同じく、接触行為＋移動／状態変化が一つのフレームを成すと考え、イメージスキーマを使ってこれを表示する。しかし、接触行為による除去という事態をよく観察すると、参加者は接触面と移動物だけではない。接触行為を行う参加者がまず存在するはずである。また、接触行為は、例えばぞうきんやほうきなどの何らかの道具を使うのが普通であり、除去されるモノが移動するのならこの着点があるはずである。Boas の事象フレームではこうした参加者は省略されているが、本稿は包括的な説明には事象全体を表示する必要があると考え、除去フレームの基本形として、次のようなものを提案する。



二重矢印は力の伝達を表し、一重矢印は除去されるモノの移動を表す。この事象フレームは、計五つの参加者からなる。A、I、L/S、T、G は、それぞれ、動作主（Agent）、道具（Instrument）、場所／起点（Location/Source）、移動物（Theme）および着点（Goal）を表す。なお、これらの参加者役割は、このスキーマ表示から容易に視覚的に区別できるので、以下の議論では A、I、L/S、T、G という表記は省略する。

この事象フレームは、接触動詞の意味や文法とは別に、人間の心に内在するものでもあると本稿は考えている。我々人間は、（自身の体の一部を含め）何らかの道具を使って、拭く、掃く、こする、ひっかく、洗うなど、ある場所に働きかけてそこにあるものを取り除く接触行為を日常的に繰り返し行っている。それにより人間は、こうした行為を一つのまとまり、あるいは意味のある統一体（いわゆる経験的ゲシュタルト）として認識していると思われる。（11）は人間が身体経験を通じて獲得したイメージスキーマの一つである、と本稿は考えている。

認知文法を体系的に論じる Langacker（1987, 2008）は、概念ベースと呼ばれる認知領域の中の注意の焦点が向けられる部分をプロファイルと呼んでいる。よく例に挙がる直角三角形で言うと、この図形全体が概念ベース、この斜辺がプロファイル（の一つ）にそれぞれ当たる。これを本稿に当てはめると、（11）の事象フレーム全体が概念ベースに当たり、この中の注意の焦点が向けられる参加者がプロファイルに当たるだろう。前節にて、Boas（2003）は参加者のプロファイルがどんな

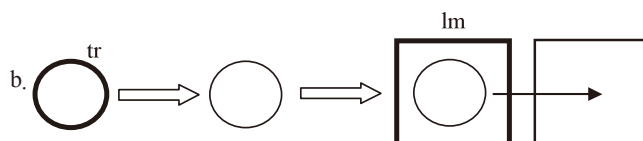
役目をするか言及していないことを指摘した。一方、本稿は、参加者がプロファイルされるとこれらは統語構造で義務的に実現する、と考えたい。

本稿は、それぞれの参加者がどんな統語項に実現するかをできるだけ予測できる事象フレームを目指す。そこで援用したいのは、特に Langacker (2008) で詳しく論じられているトラジェクター (trajector) やランドマーク (landmark) といった認知文法の考え方である。Langacker (2008:70) は、プロファイルされる参加者のうち、最も認知的に際立っているものをトラジェクターと呼び、二番目に際立っているものをランドマークと呼んでいる。また Langacker (2008:365) は、主語はトラジェクターをコード化する名詞句であり、目的語はランドマークをコード化する名詞句としている。さらに Langacker (2008:367) は、行為連鎖を表す事態については、この先頭にくる参加者がトラジェクターとなるといった主旨のことを述べている。こうした Langacker の考えに従えば、トラジェクターになる参加者が判明した後にランドマークとなる参加者を指定しさえすれば、事象フレームがどんな統語構造に実現するかを、正しく予測することが可能になる。

以上を踏まえ、本稿が問題とする接触動詞の多義性と様々な文法形式を説明したい。まず、基本形である NP V NP の文から説明する。以下、例文とその事象フレームを示す。

(12) 基本形

a. Terry swept the floor. (= 1 b)

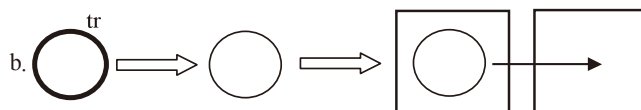


tr と lm は、それぞれトラジェクターとランドマークを表す。ここでは動作主と場所 / 起点のみがプロファイルされ、上で述べた Langacker の考えに従えば前者がトラジェクターとなるので、後者デフォルト的にランドマークになる。これにより、前者は主語に実現し、後者は目的語に実現する。本稿は、文法形式については (12a) を基本形と見なすので、事象フレームについても (12b) を基本形と見なす。これにより、(12a) 以外の文の事象フレームは、(12b) を出発点に何らかの認知的操作を経て得られることになる。

本稿は、基本形 (12b) からある事象フレームに至るまでに適用する認知的操作の回数が、基本形 (12b) とこの事象フレームとの意味的距離に相当すると考える⁴。ただし、後で述べることに関わるが、再解釈という認知的操作を行う場合は別である。第一節で挙げた例で言うと、基本形 (12b) との意味的距離が一番近いのは、(1, 2a)、(1, 2d) および (4a,b) の事象フレームである。(1, 2d) はさらに別の形式へとつながっているので、先に (1, 2a) と (4a,b) から説明する。以下に示すのが、それぞれの事象フレームである。便宜的なものであるが、それぞれを区別するための名称も併せて示す。

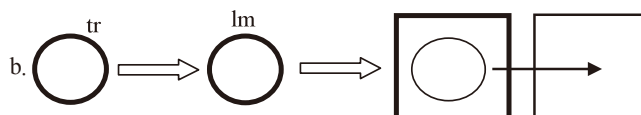
(13) 目的語省略形

a. Terry swept. (= 1 a)



(14) 道具目的語形

a. John wiped a cloth over the table. (= 4 a)

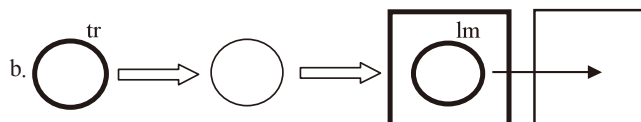


(13b) では、(12b) の場所 / 起点のプロファイルが取り消されている。本稿はこの認知的操作を「脱プロファイル」と呼ぶことにする。これにより、(13b) ではプロファイル参加者は一つだけになり、結局これのみが統語項（ここでは使役連鎖の先頭にあるので主語）に実現することになる。一方 (14b) では、(12b) ではプロファイルされていなかった道具が新たにプロファイルされている。本稿は、この認知的操作を「プロファイルの追加」と呼ぶことにする。ここで、基本形に新たに（一つの）プロファイルが追加された場合、新たなプロファイル参加者は、使役連鎖の先頭を除くその他のプロファイル参加者より認知的際立ちが大きい、と考えてみたい。これにより、ランドマークは場所 / 起点から道具にシフトし、道具が目的語に実現することになる。場所 / 起点は、ランドマークを解除されてもプロファイルされたままなので、目的語以外の統語項に義務的に実現する。

次に (1, 2d) の形式を説明する。以下に示すのがこの事象フレームである。

(15) 使役移動起点形

a. Terry swept the leaves off the sidewalk. (= 1 d)

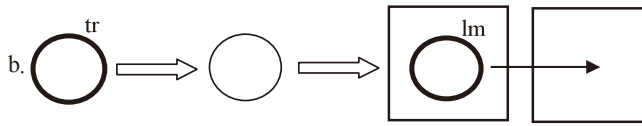


(15b) は、移動物が新たにプロファイルされている。これにより、この参加者はランドマークとなり、目的語に実現することになる。場所 / 起点は、(14b) と同じく、ランドマークを解除されてもプロファイルされたままなので、主語や目的語以外の統語項に義務的に実現する。(15b) は、(13b) や (14b) と同様に、一回の認知的操作によってできたものなので、これらの三つの基本形 (12b) からの意味的距離は同じである。

(15b) にさらに認知的操作を加えたものが、(3 a,b) の事象フレームであり、これにさらに認知的操作を加えたものが (1, 2c) の事象フレームである。これらは以下のように形で表される。

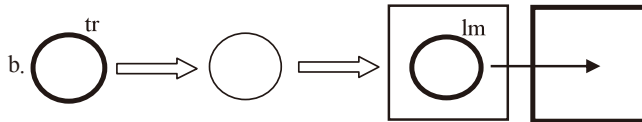
(16) 使役移動起点 / 着点省略形

a. Terry swept the leaves off. (= 3 a)



(17) 使役移動着点形

a. Terry swept the crumbs into the corner. (= 1 c)

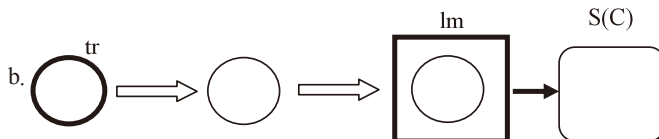


(15b) の場所 / 起点を脱プロファイルした事象フレームが、(16b) である。これにより、この参加者は統語構造に実現しない。前節にて、Boas (2003) は (15a/1 d) と (16a/3 a) の両方に同一の事象フレームを当てはめている点が問題だと述べたが、本稿はこの問題を解消している。(16b) の着点をプロファイルした事象フレームが (17b) である。これにより、この参加者は統語構造に新たに実現している。上で述べたように、ランドマークのシフトは、基本形 (12b) にプロファイルが追加された場合に起こると本稿は考える。(17b) は、もはや基本形ではない (16b) にプロファイルの追加が適用された形なので、移動物がランドマークである点は (16b) を引き継いでいる。

最後に、(1, 2 e) と (1, 2 f) の形式を説明する。これら意味は、これまで説明した構文と異なり、(11) の事象フレームのみではとらえきれないと思われる。(11) は使役移動のみを表すのに対し、(1, 2 e) は使役移動によって起こる状態変化事態、(1, 2 f) は使役移動によって起こる作成事態をそれぞれ表すからである。まず、(1, 2 e) については、この構文の事象フレームとして次のようなものを本稿は提案する。

(18) 状態変化形

a. Terry swept the floor clean. (= 1 e)



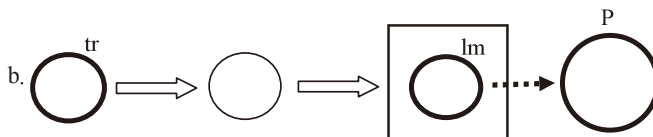
太線矢印は状態変化、角丸四角形は結果状態をそれぞれ表す。この表示の後半部分は、場所 / 起点を表す参加者が clean という state になることを表す。前節にて、Boas (2003) が提案するスキーマ表示では (7 b) から状態変化が読み取り困難であることを指摘したが、(18b) はこれを明示している。いま述べたように、(18a) は使役移動によって起こる状態変化を表すと本研究は見て

いる。一方、上で説明した三つの使役移動を表す文のうち、(18a)と同じく場所／起点を表す項が統語的に実現しているのは(15a)である。この共通点に着目し、本稿は(15b)を再解釈することで(18b)のような形が得られると考えている。ここで言う再解釈とは、移動から状態変化へと視点を移して事象をとらえ直すことである。これまで何度か言及した意味的距離について言うと、(18b)はその骨組み自体が(11)の形になっていないので、(17b)よりも基本形(12b)からこれが遠いことになる。

作成を表す(1,2f)の事象フレームとして、本稿は次のようなものを提案する。

(19) 作成形

a. Terry swept the leaves into a pile.



(19b)では構築物(product)という新たな参加者が加わっている。作成とは、材料を何らかの別のものに変えることなので、これを一種の状態変化と見ることもできる。しかし、(18a)が意味する状態変化はthe floorというモノの性質の変化であるが、(19b)のそれはむしろthe leavesというモノの形状の変化である。この点を区別するために、(19b)では太線の破線矢印を使ってこれを表している。本稿は、(18a)と同じく、(19a)も使役移動によって起こる変化を表すと見ている。一方、上で説明した三つの使役移動を表す文のうち、(19a)と同様に移動物を表す項が目的語であり、着点を表す項がないのは(16a)である。この二つの共通点に着目し、本稿は(16b)を再解釈することで(19b)が得られると考えている。ここで言う再解釈とは、移動から形状変化へと視点を移して事象をとらえ直すことである。なお、基本形(12b)との構造的距離が(17b)より遠い点は、(19b)も(18b)と同じである。

5 結語

以上、除去の事象フレームをイメージスキーマ表示し、プロファイル、トラジェクターおよびランドマークといった認知文法の考え方を援用して、接触動詞の多義性とこれに伴う多様な文法形式を包括的に説明した。多義性については、基本形の事象フレームを出発点に①プロファイルの追加、②脱プロファイルあるいは③再解釈といった認知的操作が適用され、それぞれの事象フレームに至る、という形で説明した。これを図式的に示すものが(20)である。[+P]、[-P]、[RI (reinterpretation)]は、プロファイルの追加、脱プロファイルおよび再解釈をそれぞれ表す。L/S (場所／起点)、I (道具)、T (移動物)、G (着点)はこうした操作が適用される事象フレーム内の参加者を表す。

(20) 接触動詞の多義性の仕組み

- a. 基本形 → 目的語省略形
L/S [-P]
- b. 基本形 → 道具目的語形
I [+P]
- c. 基本形 → 使役移動起点形 → 使役移動起点 / 着点省略形 → 使役移動着点形
T [+P] L/S [-P] G [+P]
- d. 使役移動起点形 → 状態変化形
L/S,T [RI]
- e. 使役移動起点 / 着点省略形 → 作成形
T [RI]

(20) の図式は、本稿が取り上げる計八つの接触動詞の意味 / 文法形式を全て説明している、という意味で「包括的」と言える。事象フレームと統語項の関係は、次のような考え方を利用して説明した。

(21) 事象フレームと統語項

- a. プロファイルされる参加者は統語項に義務的に実現する。
- b. 上記参加者のうち、認知的際立ちが最も大きいものをトラジェクター、これが二番目に大きいものをランドマークと呼ぶ。
- c. トラジェクターは主語に、ランドマークは目的語に実現する。
- d. 使役連鎖の先頭の参加者がトラジェクターとなる。
- e. 基本形に新たにプロファイルが追加された場合、新たなプロファイル参加者は、使役連鎖の先頭を除くその他のプロファイル参加者より認知的際立ちが大きい。これにより、この参加者が新たにランドマークになる。

(21b,c,d) は Langacker (2008) によるものだが、(21a,e) は本稿の提案である。本稿は、これら五つに従うと、それぞれの事象フレームがどんな文法形式に実現するか予測可能になると述べた。

* 本稿は、自著である田辺 (2015) を加筆修正したものである。

注

- 1 RHL の他に、影山 (1996)) や Van Valin (2005) など述語分解表示を説明の理論的枠組みにしている。述語分解表示は、動詞の語彙的アスペクト (状態、到達、活動、達成) の違いを明確にするが、それぞれの動詞 (本稿に当てはめるなら接触動詞) の具体的な意味を表す性質のものではない。よって、少なくとも述語分解表示のみに頼るのであれば、どのモデルを使っても、接触動詞の多義性を具体的に説明するに

は不十分だろう。

- 2 以下の議論では、Boas (2003) を踏襲し、「フレーム」という用語の代わりに特に「事象フレーム」という用語を用いるものとする。
- 3 認可 (licensing) は、Boas (2003) の中で極めて重要な術語ではあるが、明確な定義が述べられていない。同研究の議論の流れから、本稿はこのように解釈することにした。
- 4 意味的距離とは、言語使用者の認識の中での意味の遠近を意味する。ただし、本稿が提案する意味の遠近が実際に言語使用者の直感に一致するかについては、一定数の母語話者を対象とする調査により検証する必要がある。これについては今後の課題としたい。

参考文献

- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版.
- 田辺英一郎 (2015) 「接触動詞の多義性について」『鶴岡工業高等専門学校研究紀要』第50号, 17-24.
- 都築雅子 (2004) 「行為連鎖と構文Ⅱ：結果構文」中村芳久 (編)『認知文法論Ⅱ』89-136. 大修館書店.
- 中村捷 (2003) 『意味論』 開拓社.
- Boas, Hans C. (2003) *A constructional approach to resultatives*, CSLI Publications.
- Dixon, R. M.W (2005) *A Semantic approach to English grammar*, Oxford University Press.
- Fillmore, Charles J. (1982) Frame semantics. In The Linguistic Society of Korea (eds.) *Linguistics in the morning calm*, 111-137, Hanshin.
- Langacker, Ronald, W. (1987) *Foundations of cognitive grammar*, vol. 1, Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*, Oxford University Press. (山梨正明他訳 (2011) 『認知文法論序説』 研究社.)
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1991) Wiping the slate clean: a lexical semantic exploration. B. Levin and S. Pinker (eds.) *Lexical and conceptual semantics*, 123-151. Blackwell.
- Nemoto, Noriko. (2005) Verbal polysemy and frame semantics in construction grammar: Some observations on the locative alternation. In M. Fried and H.C. Boas (eds.), *Grammatical constructions Back to the roots*, 119-136. John Benjamins.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1998) Building of verb meanings. Miriam Butt and Wilhelm Geuders (eds.) *The projection of arguments: Lexical and compositional factors*. 97-134. CSLI.
- Van Valin, Robert, D. Jr. (2005) *Exploring the syntax-semantics interface*, Cambridge University Press.

